

民主青年新聞

●ホームページ www.dylj.or.jp ●Eメール minsin@dylj.or.jp

見どころ

新学期・新入学 応援!

(6、7面)

政治をゆがめる「カネ」

(3面)

若者よ、マルクスを読もう

(10、11面)

基地の島で抵抗を学ぶ



▶「止めよう辺野古新基地建設! 国の横暴・工事強行に抗議する県民集会で「新基地ノー」の思いを固める学生たち(2月22日、キャンプ・シュワブ第2ゲート前)

「戦争の道具になる基地に反対」「きれいな海を壊さないで」。沖縄・辺野古への米軍新基地建設に反対する住民は昨年7月から、建設資材などが運び込まれている辺野古の米海兵隊基地キャンプ・シュワブのゲート(通称)前に座り込んで抗議行動を続けています。日本国と米軍による度重なる弾圧に屈せず、「基地は要らない」と民意を掲げ続ける抗議の現場には、共感や関心を持った青年が集っています。(文中は一部仮名、日限広志記者)

沖縄・新基地ノーの抗議に集う青年たち

戦争と向き合える場へ

2月20日、汗ばむほどの陽気の下、第2ゲート前には青年・学生を含めた約150人が集まりました。「新基地反対」「海を殺すな」などのプラカードを掲げ、沿道の芝生に張り出されたテントの中やいすに座り、活動の報告や参加者の決意表明などを聞きました。日中の抗議行動はゆったりとした雰囲気が進みま



▲辺野古の砂浜を分断する米軍フェンスと基地建設反対の横断幕を見学する民青学生班のメンバー(2月21日)

「学生は今だからどうぶり現場に浸って、学びたい」と話すのは今春から専門学校に進学する川村博樹さん。東京から来た川村さんは昨年10月から沖縄を訪れ映像や写真を撮っています。高校2年の時に第2次安倍政権が発足し、「戦争になるかもしれない。反対するために戦争と向き合える場所に行きたい」と思いを深める中で辺野古にたどり着きました。座り込みに来た女性から沖縄戦の体験を聞きました。「戦場で食べ物を探して、やっと見つけた水たまりが、血で真っ赤だった。それを飲んだら、余計に戦争の怖さを感じた」

「ウチナンチュ(沖縄人)として来た」と言うのは米軍普天間基地のある宜野湾市から参加している福田世さん(大学2年)。「基地の存在におかしさを感じつつも、いつしか「慣れていた」と言います。大分で平和学を学ぶ中で「当たり前でいいの?」と自問した福田さんは昨年夏、基地反対の活動をする母親から「行って見ない?」と誘われゲート前の抗議に通うようになりました。福田さんは、米兵による少女暴行事件などで人権が踏みしめられてきたことに「恐怖を感じて生きてきた」と言います。「自分の体が狙われる対象になるのは人格否定以外の何物でもない。そもそも人格否定の急に変ったからびっくりした。国からの攻撃はいきなり来る」と言います。

訓練をする軍隊が要らない」
国の弾圧は突然に

ゲート前の抗議行動とは

「辺野古に新基地は要らない」一。沖縄県民が昨年の県知事選挙や衆議院選挙などで示してきた民意は、安倍政権と米軍によって踏みにじられています。安倍政権は現在、工事のための海上ボーリング(掘削)調査を再開。これに関連して巨大なコンクリートブロックを海中に投下しサンゴを破壊しています。住民は作業を海上で阻止・監視する抗議行動を連日行っていますが、海上保安官が抗議船に強引に乗り込み抗議の参加者を拘束するなど暴力的な警備活動が問題になっています。



基地は人と調和しない

朝の行動では、ゲート直前で工事車両などの進入を阻止する中で、機動隊による強制排除を受け負傷した参加者もいます。「機動隊の対応は反対派が追い詰められている証」と話すのは東京から来た手塚京から来た奥田愛基さん(大学3年)。「自由と民主主義のための学生緊急行動(ex-SASPL)」として、朝の阻止行動や「琉球新報」などの記事の解説をユーストリムやツイッターで発信しています。「ゲートを封鎖する人たちは年配の方も多く、緊張感が続く中で本当に疲れている。対決点は明確で、政治的な解決しかない」と語気を強めます。